

Ⅱサムエル 18 章「アブサロムの最期」

今日の聖書箇所には、謀反を起こしたアブサロムの最期が記されています。その最期はとても寂しいものでした。また、その死に接したダビデの悲しみ大きいものでした。この記事を通して私たちは、家族や周囲の方々との人間関係について、また、罪の赦しの恵みに真に生かされることについて考えさせられます。

1. ダビデと兵たち（：1～5）

ダビデは陣営を整え、三つの部隊に分け、それぞれの部隊の隊長として、ヨアブ、アビシャイ、イタイを立てます。イタイはペリシテのガテからダビデのもとに亡命してきてまだ日が浅いのですが、それでも 15 章に記されていたように、二人の間には信頼関係が築かれていました。

そして、ダビデは「私自身も、あなたがたと一緒に出陣する」と言います。しかし、兵たちは言います。3 節。敵の狙いはダビデなのだから、ダビデは背後で守られていることが大切だと言います。「今、あなたは私たちの一万人に当たります」ということばには、自分たちの主人であり王であるダビデを、いのちをかけて守ろうとする兵たちのダビデに対する尊敬と信頼が込められています。

ダビデは兵たちのことばに従いました。そして、マハナイムの町の門のそばに立って、出陣する兵たちを見送りました。このようなダビデと兵たちの信頼関係が勝利につながる一つの要因となるでしょう。

部隊を送り出すにあたって、ダビデは 3 人の隊長たちに命じました。「私に免じて、若者アブサロムをゆるやかに扱ってくれ」。ダビデがこう命じたことを兵はみな、聞いていました。長い間、心を通わせることがなかった二人ですが、ダビデは息子アブサロムをなおも愛していたのでしょう。また、これまでのアブサロムの行動について、つまりアムノンを殺害したこと、今は謀反を起こしていることについて、ダビデは自分にも責任があると思っていたのでしょう。

ダビデが自分も出陣したいと言ったのも、同じ理由だったのでしょう。自分たちの勝利を願っているけれども、敵対するアブサロムをなんとか助けたいと思っていたのでしょう。

2. アブサロムの死と墓（：6～18）

アブサロム陣営との間にはエフライムの森があり、その森が戦場となりました。その森は密林でした。ダビデの兵たちは経験豊富で、密林での戦いにも慣れていたのでしょう。一方、アブサロム陣営はダビデ軍より大軍でしたが、その兵たちは全イスラエルからの寄せ集めであり、多くの者は森の中ではうまく動き回ることさえできなかったようです。それでダビデ軍が優勢となり、アブサロム陣営で 2 万人が討たれたということです。

アブサロムも戦いの先頭に立っていました。そして、ダビデの兵たちと相対することになります。アブサロムはらばに乗っていました。ところが、「大きな檜の木、茂った枝の下を通った」時に、アブサロムの髪の毛がその木の枝に引っ掛かり、彼は宙づりになってしまいました。そのアブサロムの状態をダビデ軍の兵の一人が見て、ヨアブに知らせました。その兵は、ダビデが 3 人の隊長たちに命じたことを聞いていたので、「王のご子息に手は下せません」と言いました。しかし、ヨアブは「ぐずぐずしてはいられない」と言って、その場に行き、まだ檜の木に引っ掛かったままのダビデ軍を槍で突き通しました。ダビデの思いよりも敵将を打って戦いを終わらせることを優先させました。こうして、アブサロムの最期はあっけないものでした。

ヨアブは角笛を吹き鳴らし、戦いをやめさせました。ダビデの兵たちは、アブサロムのからだを取り降ろし、森の中の深い穴に投げ込み、その上に大きな石塚を積み上げました。呪われた者の埋葬場所であることを示すことでした。また、18 節にあるように、アブサロムは生きていた間に、一本の柱を立てて、自分の名をつけていました。「私の名を覚えてくれる息子が私にはいないから」と言っていたということです。アブサロムの寂しさが表されています。

このようなアブサロムの最期やこれまで歩みを思うと寂しいものだったと感じます。彼の周囲には、戦いの前線に出ないようにと進言する家来がいなかったのでしょうか。檜の木に宙づりになったとき、助けるたり、命がけで守ろうとする家来がいなかったのでしょうか。謀反を起こす前にアブサロムは 4 年間にわたって、人々の

心を盗んだと書かれていましたが、心から信頼し合える友や家来たちがいなかったのでしょうか。異母兄弟を含めれば多くの家族がいましたが、その中にも力を合わせる者はいませんでした。でも実は、父親ダビデはアブサロムを愛していたのですが、二人が心を通わせることはできませんでした。なんと寂しく、悲しいアブサロムの人生だったことかと思えます。

ひるがえって自分のこととして、与えられている家族や主にある兄弟姉妹との交わりを大切にしたいと思わされます。交わりを妨げる心にある罪を主の前に悔い改め、相手と心を通わせ、信頼関係を築いていけるように、思いとことばと行いに気を配りたいと思えます。

3. ダビデの嘆き (: 19~33)

祭司ツァドクの子アヒマアツは勝利についてすぐにダビデに伝えに走りたいと申し出ます。しかし、この勝利は、ヨアブにとっては悩ましいことでもありました。ダビデ軍の隊長として敵将を討ちましたが、ダビデのアブサロムに対する思いを聞いていただけに、王子の死を伝えることははばかられました。

そこでヨアブはクシュ人に伝令を命じます。それでもアヒマアツは、自分も伝令に走りたいともう一度ヨアブに言います。彼はまだ若く、勝利の報告より息子の消息を気に掛ける父親の心情を想像できなかったのでしょうか。ヨアブは彼を送り出します。アヒマアツは、クシュ人とは違う道を通り、遠回りでも走りやすい低地への道を通ったので、クシュ人よりも先にマハナインに着きました。

その頃、ダビデは町の外門と内門の間に座って、戦いについての知らせが届くのを待っていました。見張りが一人で走ってくる男が見えると伝えるとダビデは、「ただ一人なら、吉報だろう」と言います。その後もダビデは、「それも吉報を持って来ているのだろう」、「あれは良い男だ。良い知らせを持って来るだろう」と言います。知らせは吉報だろうと思ひ込もうとしているように感じます。

そして、最初にアヒマアツが到着し、ダビデの前で戦いの勝利を報告しました。しかし、ダビデの関心は息子のことです。まず尋ねたことは「若者アブサロムは無事か」でした。アヒマアツはヨアブが止めようとした理由を理解したでしょう。その問いに対して彼はことばを濁すしかありませんでした。

続いて到着したクシュ人も戦勝報告をします。ダビデはやはり「若者アブサロムは無事か」と尋ねます。クシュ人はアブサロムの死を冷静に伝えました。

するとダビデは門の屋上に上って、号泣しました。33節。長年積もっていた感情を吐き出しているかのようです。「私がおまえに代わって死ねばよかったのに」と悲しみ浸っていることが分かります。

振り返ってみると、11年もの間、ダビデはアブサロムと向き合わずにきてしまいました。それは、バテ・シェバルにまつわる自らの罪が影響していたのでしょうか。主の前に悔い改めて、罪を赦されましたが、罪の結果の咎めを背負い続けていたダビデは、子どもたちに対する関わり方にためらいがありました。そして、最終的に悲劇を迎えることになってしまったのです。

このようなダビデの姿から思うのは、罪の影響の深さ、大きさということです。罪を軽く考えてはならないし、罪の刈り取りをしなければならぬことを忘れてはならないのです。しかし、どんな罪でもイエス・キリストの十字架によって赦していただき、赦しの恵みに生きることができます。それでもサタンは、過去の罪を思い起こさせて、救いの喜びを消そうと働きかけてきます。しかし、それに負けてはならないのです。みことばによって勝利することができるのです。イザヤ1章18節。Iヨハネ1章9節。そのようなみことばに立って、主の赦しを感謝して、主の前にへりくだることができます。そして、心を開いて、人と向き合うことができるのです。

今日の箇所から二つのことを示されます。一つは、与えられている家族や主にある兄弟姉妹との交わりを大切にすることです。私たちの心にある交わりを妨げてしまう罪を、主の前に悔い改めましょう。そして、心を開き、向き合い、信頼関係を築き、保っていけるように、自分の思いとことばと行いに気を配りましょう。

もう一つは、罪の赦しの恵みに真に生かされることです。サタンが揺さぶりをかけてくる時にも、赦しの約束のみことばを思い起こし、自分の悲しみに浸るのではなく、主の恵みの豊かさに浸りましょう。そして、心を開いて、人と向き合ひましょう。